（別紙様式２）

公立小松大学重点研究「みらい」　研究実績報告書

氏名	所属・職名	助成金額
佐藤　大介	保健医療学部看護学科・准教授	1,000 千円

研究課題名	外来化学療法中のがん患者に対する AI 機能を用いた遠隔看護システムの開発
研究期間	令和２年６月１日　～　　令和４年１月３０日
研究の概要	〔研究開始当初の背景，研究の目的，研究の方法等について記入〕 本研究では外来化学療法を受けるがん患者が治療による副作用や有害事象、疾患の進行による症状と向き合いながら生活を自らコントロールし、症状の悪化を予防・軽減できる対策を習得させる。その方略としてインターネットを用いた問診ー回答方式による遠隔看護システムの構築と、クロスオーバー試験により、症状の増悪予防及び QOL 向上を目指し、遠隔看護システムを用いた看護介入を実践・評価することを目的とした。方法はクロスオーバー試験により、外来化学療法を受けているがん患者に対して Telenursing Symptom manegement system for Chemotherapy in an Outpatient Treatment (以下 T-SCOT)による介入を受けた群(以下介入群)と通常の診療を受ける群(以下対照群)を比較し、治療による副作用や症状の増悪予防及び QOL の変化を測定し遠隔看護システムの効果を明らかにした。
研究の成果	【結果】1)対象者の概要：12 名の対象者から同意を得た。男性 8 名(66.6%)、女性 4 名(33.4%)で平均年齢が 68.6±5.2 歳であった。がんの種類は、消化器系 7 名(58.3%)、呼吸器系 3 名(25.0%)、乳腺 2 名(16.7%)であった。就労をしている対象者は 3 名(25.0%)、研究を同意した段階での化学療法の経験は、平均 12.3±4.3 か月であった。2) 介入群及び対照群の MDASI-J、QOL-ACD の介入前後での比較：介入群において、主要評価および副次評価の介入前後の比較では、MDASIーJ、QOLーACD ともに有意な差が認められなかった。一方対照群では、MDASI-J の症状の強さ(p=0.03)、症状による生活への支障(p=0.04)の介入 3 か月後の得点が有意に高く、症状が悪化していた。3)介入 3 か月後の介入群と対照群における MDASI-J、QOLーACD の比較：介入群と対照群の介入 3 か月後の MDASI-J と QOL-ACD との比較では、MDASI-J において有意な差が認められなかった。【考察】介入群の対象者は T-SCOT による介入の受け入れもよく、仕事や家事の合間を見つけて、決まった時間にタブレットからの入力を実施していた。貸与したタブレット端末から自分のバイタルサインや過去の体調の変化を、いつでもどこでも可視化して確認できる点、医療者からのタイムリーな反応が、QOL の悪化を防ぎ、自己効力感を高めた一つの要因かと考えられる。
研究成果発表状況	〔学術誌掲載論文，図書，学会発表，新聞掲載，研究に関連して作成したＷｅｂページ等について記入〕 1. 佐藤大介.霜山真：外来化学療法中のがん患者に対する AI 機能を用いた遠隔看護システムの開発. 日本遠隔医療学会誌 17(2).148-151.2021 2. Daisuke.S, Makoto.S:Effectiveness of a Telenursing System to Prevent the Exacerbation of Symptoms in Patients with Cancer Undergoing Outpatient Chemotherapy. Open Journal of Nursing 11(6) 466-476 2021 【受賞】第 25 回日本遠隔医療学会学術集会優秀演題賞 受賞

	区　　分	執行額（円）	備　　考
経費の執行状況	物品（ipad mini、Bluetooth 付血圧計、パルスオキシメーター、体温計）	550,699	
	通信費（インタネット代）	180,000	
	論文投稿料	120,000	